

随 想

論文著者名に middle name を

玉木 正男

middle name が学術発表者名にあってほしい。あなたの独創的な研究が同姓同名の別人の業績にされてしまう混同、誤解をなるべく少なくするため、科学情報の急速な国際化の時代に、特に欧文（英文）で研究を発表して行く若い人にこれを提案したい。わが国の医学の専門学会についてしらべると、会員数1000人以上の学会で機関誌上の発表をすべて英文としているものがあり、掲載論文の抄録、集会での発表の要約をすべて英文としているものは少なくない。

いうまでもなく、出生時に与えられる「名」given name (first name) と「姓」surname (family name, last name、名字、苗字) との間におかれる名が middle name であるが、たとえばキリスト教徒では洗礼の時につけられる名、またスペイン系の人では母の姓を middle name としている例が多いようである。given name または surname にハイフン(-)でつないだ形式もよく見かける。筆者の手もとにあるいくつかの国際会議の参加者名簿を調べると、middle name はイスラエルの会員には少なく、日本人には全く見られないが、他の東洋人には多いようである。

ローマ字で書かれた名前が、三つからなる場合よりも二つの場合、またしばしばみるように first name がアルファベットただ一字で略記される場合には、同姓同名別人の混同が高率におきるのはもちろんである。あまり多くはない姓をもつ筆者玉木正男の場合でも、Tamaki は玉木の他に玉置、田巻など、また Masao は正男の他に正雄、正夫、昌男などをふくみ、Mと略記されてはまさ子、みどりなどの名もあり得る。1992年前半の Biological Abstracts をしらべてみて、M. Tamaki の発表が十数編あったのには全くおどろいた。筆者以外の学者諸氏の医、歯、薬、生物学に関連した発表である。しかし、もしも筆者が今から middle name (出身地の名を考えてはいるが) を作って用いるとすれば、今までに発表してきた Masao Tamaki とは別人と誤解される可能性も生ずる。従ってこれから論文発表を始める若い人には、なにか middle name を考えて使ってほしいのである。論文発表には戸籍法など法規上の配慮などはもとより不要である。

結婚、養子縁組などで **family name** が変わった後の発表においては、それ以前の発表に用いた **family name** をも示す（たとえば **middle name** として）ことが望ましい。そうしなければ新発表は別人のものとの誤解を生ずる恐れがあり、またそれは医師、弁護士などでは業務上も不利であろう。一例をあげると、**Cronkhite-Canada** 症候群を **Dr. Cronkhite** と共同報告した放射線科医 **Dr. Wilma Canada** はその後 **Diner** と改姓されたようで、この症候群についての続報は旧姓 **Canada** を **middle name** とする **Wilma Canada Diner** という著者名で発表されたことは、筆者は先年「画像診断」誌に紹介し、また何人かの未婚の女性学会人に無遠慮に申したことであつた。[なお、反対に結婚前の **maiden name** を結婚後 **middle name** に用いることを政治的配慮から避けるようになった珍しいケースとして、米国 **Clinton** 大統領の **Hillary** 夫人（弁護士）のことが報ぜられている。] 洗礼名を **middle name** にする例は西洋人に大変多い。最近日本のある大きいホテルに宿泊した時受付でたずねたところ、国籍は **Japan** と記入する人で **middle name** の欄を空白にせず記入する客が近年増えてきたという。

近年日本の学界は各方面で多くの独創的な研究を生み、急速な国際化の波に洗われている。専門誌に日本語だけで発表された論文でも、その要旨あるいは全文の英訳を海外で留学生が依頼される例も少なくないという。これからの若い研究者は、**middle name** を作って論文著者名に加えてもらえないものであろうか。外国人のまねとは思わず、科学情報の正確を期するためと思いたいのである。

(1993年7月記)

(大阪市立大学名誉教授)